

【論文】

和歌教材の可能性をめぐって

——『古今和歌集』歌から

青木太朗

はじめに

現行の『国語総合』の教科書にはいずれも和歌単元があり、主に万葉集・古今集・新古今集に所載の和歌

が取り上げられている。本稿ではこのうち古今集の歌に注目し、授業で扱う際の切り口や広げ方について述べてみたい。各教科書会社が掲載する古今集歌を歌番号で示すと左表のようになる(注)。いずれの会社も二

表 『国語総合』掲載 古今集歌一覧

歌番号	(初句)	教育出版	桐原	数研	第一学習社	三省堂	大修館	筑摩	東京書籍	明治書院
2	袖ひちて	○	○	○	○	○	○			○
27	あさ緑	○								
53	世の中に		○		○	○	○			○
56	見わたせば							○		
84	ひさかたの						○			
89	桜花							○	○	
139	さつき待つ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
145	夏山に	○								
157	暮るるかと			○						
169	秋来ぬと		○	○	○	○	○		○	○
193	月見れば	○								
272	秋風の						○			
277	心あてに	○								
296	神なびの									○
304	風吹けば							○		
315	山里は	○	○	○	○	○	○			○
330	冬ながら							○		
337	雪降れば		○		○				○	
349	桜花							○		
391	君が行く				○					
404	むすぶ手の	○								
406	天の原				○			○	○	○
469	ほととぎす	○								
478	春日野の							○	○	
552	思ひつつ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
553	うたたねに				○					
616	起きもせず			○						
625	ありあけの					○				
797	色見えて	○								
829	泣く涙							○		
847	みな人は				○					
872	天つ風					○				
933	世の中は		○							○

種及び三種の教科書を用意しているがここではその区別をせず、教材として取り上げたもののみを示す。

どの出版社にも採用されているのは、一三九「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏・よみ人知らず)と五五二「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」(恋二・小野小町)の二首であつた(注二)。他にも比較的多くの社に共通して見られるものが少なからずある。一方、独自に注目した歌を用意している社の多いことも確かめられる。それぞれ特色を出そうと工夫している様子が伝わる。

二〇一六年一二月に出された中央教育審議会の答申「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(注三)では、国語科について

創造的・論理的思考を高めるために、「思考力・判断力・表現力等」の「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされる

とした上で、「目標の在り方」の一つに「言葉を通じて伝え合う力」を挙げている。また「国語科における『見方・考え方』を

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方な

どに着目して捉え、その関係性を問い直して意味づけることを、「言葉による見方・考え方」として整理することができる。

とまとめる。そして、二〇二二年度の学習指導要領の改定で現行「国語総合」を継承することになる共通必修科目「言語文化」に対しては

上代(万葉集の歌が詠まれた時代)から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目として、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」を中心としながら、それ以外の各事項も含み、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成する

ことを求める。授業では「言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する」ことに留意し、

国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とは、アクティブ・ラーニングの視点から言語活動を充実させ、子どもたちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると見えと述べる。こうした、これからの教科指導に求められ

る事柄を視野に入れたときに、どういった教材研究が必要なのか、また、どういった授業展開が考えられるのか。

稿者はこれまで古今集時代の和歌を研究対象とし、『新撰和歌』や『古今和歌六帖』といった、従来注目されることの少なかった私撰集について、配列に関する論考を重ねてきた。また、紀貫之が恋歌で多用する「わぶ」「わびし」という特定の語に注目して詠歌方法の一端を考察したこともある^(注四)。一方で、中高一貫校に所属し、国語科の教員として古文の授業を受け持つ機会も少なくない。研究を通して得られたこの、隣り合う歌同士に注目する視点と、一つの語に注目する視点とを、高等学校の授業に活かすことはできないか。教科書に採用された和歌作品を通して提案してみたい。

必修科目である「国語総合」を通して多くの高校生が古今集の歌と出会う。全社共通して扱う二首についてここで取り上げたところで、当該教科書の世界から外へ広がることはない。古今集の魅力をより多くの歌から汲み取ってほしいとの思いから、筑摩書房と東京

書籍が取り上げた八九番歌と、この二社以外の全社に載る三一五番歌の二首を対象とする。いずれの教科書を使用する立場からも、当該教科書以外の歌に触れることになる。

一 「桜花散りぬる……」歌について

古今集八九番歌「桜花散りぬる風の名残には水なき空に波ぞ立ちける」(春下・紀貫之)は、詞書に「亭子院歌合歌」とある。亭子院こと宇多上皇が主催したこの歌合は延喜十三(九一三)年に行われた。仮名序が奏上された延喜五(九〇五)年よりも後であることから、いったん出来上がった歌集に後から補入したものと見られる。

現代語訳は「桜の花の散ってしまった風の名残として、水のない空に波が立っているよ」となる。なお、古典作品に取り上げられる桜は現在のヤマザクラが比定される。花は白色であることに留意しておきたい。前半の三句では、桜を散らしてしまった風の吹き去ったあとに花びらがひとひらふたひら残っている、という現実の世界を示す。この時の「なごり」とは、風の

残した余韻を意味する。そこに「水」という語を続けることで「なごり」にもう一つの意味が加わる。海上などで、風が静まってからもしばらく立ち続ける波をいう「なごり」である。わずかに残った白い花びらを波頭や波しぶきの白さに見立てるのだ。おのずと空は海に喩えられることになる。しかも「波ぞ」と強調すること、大空にはないはずの「波」の存在を際立たせる。今、目の前にあるのは花びらではなく波なのだ。と、自らがことばの力でつくり上げようとする想像の世界をより確かなものにしていく。歌末「ける」は詠嘆。本来立つはずのないところに波を見つけた驚きを、感動をこめてうたい上げる。風が吹き抜け、わずかに残る花びらの舞う光景が、「なごり」という一語を媒介することで、水のない大空の大海に、風が残した余波なごりが立っているという幻想的な世界へと化しているのだ。

桜花との色の類似では、当時の歌人たちは雪に見立てる歌を好んで詠んだ。古今集にも「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」（春上・六〇・紀友則）や「桜散る花のところは春ながら雪ぞ

降りつつ消えがてにする」（春下・七五・承均法師）などである。それを、大海にかいま見える波、というスケールの大きな想像の世界をつくり上げるところに歌人としての貫之の力量を見ることができるといえる。

教員用指導書での「鑑賞」を確認しておこう。東京書籍『精選国語総合』では

風にかかれて散った桜の花びらが大空に舞い散る様子を、空を海に見立て、散る桜の花びらを波にたとえたものである。「なごり」は「名残」の他に「余波」を掛けている。「余波」は波が完全に静まってしまうまで小さく立ち残っている波のことである。空に桜の花びらが舞い、まるで小さな波が立っているような情景に発想を得て、「波ぞ立ちける」から「余波」、そして「名残」という表現につながり、「風の名残」「水なき空」に結実したのである。と説明する。また筑摩書房『国語総合』では「鑑賞」とは別に「桜について」というコラムを用意し、

『古今集』には、桜の歌がすこぶる多く、とりわけその散るさまを詠む歌が多い。散ることを直接表現しないまでも、はじめから桜の花はすぐに散

るものだという観念が先行している歌も少なくない。そうした発想が一般的であるところから、華麗であるとともに、どこかに愁いやかげりを含んだものというのが桜花への共通した美意識となった

ている。右の歌も桜吹雪の華麗さに隣り合わせの、一抹の憂愁、空虚感を直感させている。

と述べている。「愁いやかげりを含んだもの」を古今集の桜の歌に見出す点や、この歌から「一抹の憂愁、空虚感を直感」することについては、読者各自によって差異があり、この読み方が万人に共通するものではないが、少なくともこの一首の理解のあり方の一つとして参考にはすることができる。

これら指導書の説明では、いずれもこの一首の歌を理解するところにとどまってしまう。古今集を嚆矢とする勅撰和歌集では秀歌を集めて事足りれりとするのではなく、収集した歌をどのように並べるかについて相当な腐心をめぐらせている。桜の歌であれば咲き始めから満開を経て散りゆくまでといった、時の流れに沿った歌をそれぞれふさわしい場所に置いている。この歌がどのような位置に配されているのかを見

た上で理解してはじめて、古今集の歌として理解したと言えるのではないだろうか。

二 古今集の中で読む

古今集の巻一・春上から巻六・冬までは季節の歌が収められている。ここでは新年から年末までの時間の流れに沿って、折々にふさわしい景物や時間を意識した歌が置かれている。ここで示された季節感が、以後の勅撰集に踏襲され、また日本人の季節感に大きく影響を及ぼしていることは言を俟たない。古今集の歌を理解するためには、配列を念頭に置くことが不可欠となる。この点について中村佳文氏は

『古今集』が表現した「季節観念」は、個々の和歌により支えられつつも、詞華集として和歌の部立・配列を有機的なものとしたことにより成り立っている。(略)これは、『古今集』研究では、常識的なことであるが、ひとたび教科書教材の採録という意味では、あまり意識されていないと言わざるを得ない。

と指摘し^(注五)、この「季節観念」を享受することで

「文法的な知識の獲得」のみや「現代語訳の暗記」から脱して、学習者自身の現在における問題意識から始発し、生活や文化の背景を考える

ことになり、そのことは

何より日本で生活することの「今」を「古典教材」で考えることに他ならないと論じている。

福田孝氏はその著書『古文を楽しく読むために』^{〔注六〕}の中で古今集の梅の歌群に注目し、全十七首について咲く梅から散る梅へと歌が並んでいることを確かめ「時の流れにしたがって歌々が並べられているところを味わって読み進めていくのも『古今和歌集』の面白ところですよ」と読者に語りかける。

また古今集の研究者である鈴木宏子氏は

たとえば学習者に、『古今集』の中で連続して並べられている十首あるいは二十首程度の歌を提示して、配列上の工夫と思われる点を自分なりに説明してもらおう。一つの正解を求めるのではなく、さまざまな角度からの指摘があり得るはずである。配列の工夫を考えることは、古典和歌を主体

的・多角的に読むこと、さらには、和歌の中で培われてきた美意識を発見することにつながるであろう。

と述べ^{〔注七〕}、恋歌を取り上げた実践例が紹介されている。

そこで、こうした観点に沿って当該歌・八九番歌を古今集の配列に戻して見ていくことにする^{〔注八〕}。

桜の歌は春上・四九番歌から始まる（詞書と左注は省略し、現代語訳を付す）。

四九 今年より春知りそむる桜花散るといふことは
ならばざらなむ（紀貫之）

今年になって初めて春を知った桜の花よ、どうか散ることは見習わないでもらいたいものだ。

五〇 山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見
はやさむ（よみ人知らず）

山高くに咲くので人も来ない桜の花よ、そんなに悲しまないでおくれよ、私が見に行つてほめてやるので。

五一 山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にも立ちか

くしつづつ（よみ人知らず）

山桜を見に来たのに春霞が山一面に立ちこめて隠しているよ。

五二 年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし

見れば物思ひもなし（藤原良房）

年を経たので年齢は老いてしまった。しかし桜の花を見ると（その素晴らしさに）物思いをすることもない。

四九は、今年初めて咲いた桜に向けて、「散るということは今までの桜に見習わないでもらいたい」と呼びかけている。咲いたばかりの時点でもう散ることの心配をしているのだ。五〇も、山高くに咲いたので人の訪れもない桜に向けて、そんなに悲しむな、私が行ってほめてやるからと、やはり呼びかけの歌である。五一はこの歌を承けているかのように、いよいよ山桜を尋ねことになる。せつかくやって来たのに、あたり一面に霞が立ちこめて満足に花が見えないと不平をかこつ。五二は詞書に「染殿の後の御前に、花瓶に

桜の花をささせ給へるを見てよめる」とある。「染殿の后」とは文徳天皇の皇后で、この歌の作者良房の娘・明子^{あきらけいこ}。山桜から一転して目の前に置かれた花に注目する。桜への思いもまた一転し、眼前の桜にすっかり満ち足りた気分であるさまを詠じている。

以下、咲く桜の歌が巻末まで十六首続く。巻二・春下に入ると散る桜の歌になる。巻頭から四首を示す。

六九 春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく（よみ人知らず）

春霞のたなびく山の桜は、散ろうというので色が変わっているのだろうか

七〇 待てといふに散らでしとまるものならばなにを桜に思ひまさまし（よみ人知らず）

「待て」と言ったら散らずに留まるもののだとしたら、どうして桜に思いをかけるのだろうか。

七一 のこりなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はての憂ければ（よみ人知らず）

残らずすっかり散るのが素晴らしいのだ、桜の花は。そのまま生きながらえてもこの世の中はいつ

までもつらいので。

七二 この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家

路忘れて（よみ人知らず）

この里に旅の宿りをとりたいものだ。桜が散り交うのに紛れて家路を忘れて。

六九では桜の色変わりにめざとく注目し、散ることへの懸念をうたう。続く七〇を見ると、そうは言っても「待て」と言ったら散るのをためらうようでは桜に思いを寄せたりはしないと、散るのが良いとする。桜へ寄せる複雑な心情が伝わるような並びである。七一は、生きながらえていてもつらいことが多い世の中なのだから残りなく散るのが素晴らしいと、七〇と同様に散る桜をたたえ、七二では家に帰るのも忘れ散る桜を心ゆくまで満喫したいという思いを詠じている。そして次の四首で桜の歌群は閉じられる。

八六 雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか

風の吹くらむ（凡河内躬恒）

雪とばかりに降り散るだけでも十分なのに、これ

以上どうやって散れといって風は吹いているのだろうか。

八七 山高み見つつわが来し桜花風は心にまかすべ

らなり（紀貫之）

山高くに咲くので遠くから見ながら私は過ごしてきたが、その桜を風は心のままに散らすようだ。

八八 春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しな

ければ（一本、大伴黒主）

春雨が降るのは涙なのか。桜の花を散るのを惜しまない人などいないので。

八九 桜花散りぬる風のなごりには水なき空に波ぞ

立ちける（紀貫之）

八六は雪に見立てた歌のひとつ。雪のように散るだけですでに十分なのに、これ以上どうやって散れといって風は吹いているのだろうか、と無理に散らせよとする風に文句を言う。八七では山高くに咲く桜なのでそばまで行けない自分は遠くから見過ぎてきたが、風はそれを思いのままに散らせることもできないように、意のままにできない我が身と対比させ、風

を恨めしく思っている。八八は桜を散らす春雨を、花を惜しむ涙にたとえる。

この流れを踏まえて八九番歌を見る。直前の三首ですでに風や雨によって桜は散り尽くされた感がある。愛惜の涙も流した。また、八六や八七では散る桜を目にすることが出来ていたのに対し、八九では花自体を見ることはもう出来ない。かろうじて残ったわずかな花びらに、ほんの前まで咲き誇っていた桜の「なごり」、面影を見るだけである。散ってしまったとはいえまだまだ桜への思いは残っているのだ、と言いたげな配列となっている。

八九番歌一首の理解だけでは桜を惜しむ歌にすぎない。ところが古今集の中では、春上・春下の二巻、計四十一首に及ぶ桜の歌群の最後に位置する。仮名序の奏上から八年後の歌をあえてこの位置に配しているのだ。撰者たち、とりわけこの歌の作者でもあり、撰者の代表格でもある紀貫之にとっては思い入れが強かったように見受けられる。貫之に限らず、古今集に関心を寄せる当時の人々に共通する、最後まで飽くことのない桜への思いを凝縮した一首でもあるのだ。

勅撰集に採られた歌の場合には、歌一首の解釈で終わらせるのではなく、隣接する歌と一緒に見ることで、一首の理解だけでは見えなかつた世界が新たに獲得されることがある。前後の歌とのつながりを考えながら読むことで、編纂の過程を追体験することができる。歌を詠んだ人への共感に加えて、歌を並べた撰者たちの思いを共有することにもなる。そして、共通することばを見つれたり、ことばの連想によるつながりに気づいたり、それぞれの歌に詠まれた世界の類似や差異を発見することで、ことば同士つながりによって描き出された、さながら絵巻物を見るような世界に入り込むことができる。

歌一首を味わう面白さだけでなく、歌集を読む面白さが待っている。そこに分け入ることではじめて古今集の世界を理解することになるのだ。

三 「山里」やごのいよば

次に、配列とは違った角度から一首の和歌を眺めてみたい。

一つのことばに注目して、そのことばを用いた和歌

をいくつか集めてみる。そこでどのような意味で使われているのかを踏まえた上で、あらためて当該歌を理解する。すると、当該歌一首だけの読み取りとは違った世界が広がる。そのことを、三一五番歌「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば」(冬・源宗于)を通して確かめていきたい。現代語訳は「山里では冬のさびしさがとりわけ厳しいものだよ。人も離れていき草も枯れてしまうかと思う」となる。

まずは「山里」という語に注目する。三省堂『精選国語総合』の教員用指導書には「鑑賞」として

本来「山里」は、山の中の人里の意であった。平安時代には貴族がこのような里に別荘を建て、また里の山荘風に邸宅を建てることなどが流行したが、「万葉集」ではほとんど登場しない。「山里」が和歌に詠まれるのは中国六朝の隱遁思想の影響があるといわれる。

「古今和歌集」では好んで詠まれ、「ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし」のように人の訪れがなく、「白雪の降りてつもれる山里は住む人さへや思ひきゆらむ」のように冬に

なれば耐えきれぬ思いをかみしめる場所などのように「山里」のイメージが定着していく。

と具体例を挙げながら説明している。一方、この歌に対して用意された発問は

・係り結びを指摘し、文法的に説明せよ。

・ここでの掛詞について説明せよ。

・「人目も草もかれぬと思へば」を口語訳せよ

の三つである。これらを授業で消化するだけでは「鑑賞」で紹介された「山里」の世界に入ることが出来な
いまままで終わってしまう。

古今集での用例をもう少し見ておきたい。「山里はものわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」(雑下・九四四・よみ人知らず)では、わびしい所ではあるが俗世間で辛く悲しい思いをするよりも住み良いと詠む。都での生活に伴うわずらわしさがかっかけとなつてか、山での暮らしにあこがれを持つ歌が詠まれるようになるのがこの時代であった。そして出家をし、俗世との関わりを断つて暮らすのも山里である。「山里」の語はないものの、同じ巻に入る「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふな

り」(九八三・喜撰法師)の後半で、世間では私のことを「世を憂」し、つまり世の中で暮らしくくなつたから、宇治山で暮らしていると言うようだ、とうたうのも「山里」の持つこのような性質を踏まえてはじめて理解出来るのである。

しかし、季節の歌を春から順にたどっていくと、必ずしも住み心地の良い場所ではなさそうだ。

「春立てど花もにははぬ山里はもの憂かる音に鶯ぞ鳴く」(春上・一五・在原棟梁)では、立春を過ぎたというのに山里ではまだ花は咲かず、鶯も物憂げに鳴いているという。そして桜が咲いたとしても「見る人もなき山里の桜花はかの散りなむ後ぞ咲かまし」(春上・六八・伊勢)と、山里は「見る人もなき」所なので、どうせ咲くのならほかの所の桜が散ってから咲けばいいのにと詠まれている。時期をずらせば訪れる人もあるかもしれないというのだ。この歌は咲く桜を集めた歌群の末尾に位置している。桜が最後に咲くのが山里である、という認識がうかがえる。

秋になってもこの雰囲気は変わらない。「鑑賞」にも紹介された「ひぐらしの……」(秋上・二〇五・よ

み人知らず)のように「とふ人もなし」といった場所であり、たとえ分け入ったとしても「山里は秋こそごととにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ」(秋上・二一四・壬生忠岑)と、鹿の鳴く音にわびしさを感じる場所のようでもある。

これらの用例を見ていくと、歌の中での「山里」は、隠遁の地である一方、人の訪れないさびしい場所であるというイメージが強く見てとれる。この傾向を知った上で当該歌に接すると「山里は」とあるだけですぐに、人の訪れないさびしい場所を思い浮かべることになる。続く「冬ぞさびしきさまさりける」では、今まで見て来た春や秋のさびしさにもまして、とりわけ冬がさびしいのだという。「冬ぞ」と係り結びでの強調が上三句に響き渡り、歌全体に緊張感をもたらしている。

小町谷照彦氏はこの一連の「山里」歌について

『古今集』で描き出された「山里」は、かなり単一な旋律のものとして整理できるように思われる。それは都の華やかな貴族の生活とは対極的な暗鬱の世界と言ってよい。

と整理されている(注九)。そして。

日常語と形は同じであっても、和歌に詠まれることによつて、意味内容や用法が固定化・類型化し、情趣や美意識が付加した語の体系をさす

いわゆる「歌語」を「歌ことば」という場合もあるとし、「山里」もこの「歌ことば」のひとつに数えあげている。「歌ことば」というとらえ方を知ること、日常の言語生活とは違つた、和歌独特の「歌ことば」の世界があることが理解出来る。一つ一つの「歌ことば」に注目し、それが古今集以降どのように扱われていったのかについて関心を向けることもできる。新古今集の歌や、小学校以来教材としておなじみの小倉百人一首の歌への興味や理解を、使用されたことばの面から深めることも可能となってくる。

一つのことばに注目し他の用例に十分に触れた上で、あらためて当該の歌に立ち戻るといふ作業は、和歌によつて培われたことばの歴史や、和歌が長い歴史をかけてつくり上げた美意識に向き合う第一歩にもなるのだ。

四 類例を探す

三一五番歌を理解するうえで欠かせないのが掛詞である。「かれ」に「人が離れる」と「草が枯れる」の二つの意味を持たせる。山里の冬の様子に思いを馳せたときに、草だけでなく人目もすっかり消えてしまうことを思うと、ますますさびしさの度合いが増していくことだという。自然と人事という、二つの異なった要素をひとつのことばで言い当てる点にこの歌の趣向がある。

この語についても他の例を確認しておきたい。古今集内から見出せるのは、この歌とは対照的に夏の草に寄せた用例である。

六八六 枯れはてむのちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな(恋四・凡河内躬恒)

すっかり枯れてしまふ後々のことも知らずに夏草が深く生い茂るように、離れてしまふ後のことなど知らずに深くあの人のことが思われることだ。

七〇四 里人の言は夏野のしげくともかれ行く君にあはざらめやは(恋四・よみ人知らず)

里人の噂は夏草のようにとどまることなく聞こえてくるが、草が枯れるように離れていったあなたに逢わずにいてよかったのだろうか。

六八六では、夏草も季節が進むとすっかり枯れてしまうように、今は足繁く通ってくる人もやがてすっかり訪れなくなってしまう、そんなことも思わずに、夏草がどんとんと茂るようになたへの思いを募らせていたことです、と、繁茂した夏草にかつての自らの思いを重ね合わせ、過ぎ去った恋を振り返っている。また、七〇四で「夏野の」草にたとえられているのは「里人の言」である。「言」は噂の意。夏草が絶えず茂り続けるように、里人の噂が途切れることなく耳に届くという。だが夏草はやがて枯れてゆき、噂も下火になっていく。噂が立ったからといって離れてゆくあなたに逢わずにいてよかったのだろうか、と今となってはなすすべのない喪失感をうたう。

いずれにせよ、夏草のイメージを踏まえて、その繁茂した草がやがて枯れるという時間の流れに合わせるように、相手が離れていった状況をうたっている。夏

草の枯れ果てたことが相手の不在を際立たせることになる。

宗于歌は古今集では冬歌の二首目に位置する。草の生い茂っていた夏を連想したり引き合いに出したりする必要はない。ただ、そこに「人目も」という語を加えたところに注意を向けたい。たとえば季節に關わりなく人目の多い都や、あるいは風流な生活を求めて都からやや距離を置いた里居をする人々など、さまざまな場所にある多くの「人目」を思い浮かべさせておきながら、そうした人さえもないのが冬の山里なのだ、という。夏草を念頭に置いたときの掛詞では、自然の変化に合わせるように人が遠ざかりそして不在となった状態を表わしていた。対してこの歌では、掛詞としては同じ用法なのだが、もともといない人をイメージの中に喚起した上で、やはりいかなかったのだ、とすることで、変わりようのない厳しい自然を、そしてその中で人間不在の寂寥感を際立たせようとしている。

古今集が編纂される十年ほど前に催された「是貞親王家歌合」^(注10)に「秋くれば虫とともにぞなかれぬ

る人も草葉もかれぬと思へば」という一首がある。下二句が宗于歌に類似する。「人も草葉もかれぬ」と、それまで通っていた人も離れていき草葉も枯れてしまったと思ったところで、虫が鳴くのに合わせて泣いている人が最後に残る。「山里は」の歌との前後関係は不明だが、この歌と比べてみると、宗于歌での山里の、人の気配さえ残らない厳しさが強調される。

宗于歌で用いられた「山里」や「かれ」という語に注目し、古今集や周辺の作品から同じ語を用いた歌を集め、それらの中に当該歌を置くことで、一首だけを見てはうかがい知ることの出来なかつた読みが可能になる。古今集でそれらの言葉がどのような世界をつくり出しているのかを知ることにもなる。「古今集の歌」としての一首の理解に留まらず、作品としての古今集の世界への理解につながるひとつの方法として、類例を探すという作業が有効であると考える。

まとめ

以上、古今集の歌の理解についてふたつの切り口を示した。ひとつは隣り合う歌の内容を踏まえたうえで

の理解。配列の妙味に歌集としての魅力を汲み取るこ
とが出来、一首の理解だけではわからなかつた世界が
開けてくる。また、特定の語に注目し、その語の使わ
れた用例を集め、それらと比較しながら歌を理解する
方法。歌集内でのことばの用い方や、類似表現と比較
することで、当該歌で使用されたことばのつくり出す
世界への理解がより深められることになる。

ただし大きな課題が残る。いずれの切り口であれ、
多くの和歌を理解しなければならぬ。たとえば配列
の妙味を味わうため必要な和歌十首を理解するには、
相当数の授業時間を費やさなければいけない。教室の
中で、すべての和歌を同じ程度に読解し生徒と理解を
共有することは難しい。

この点について小林俊洋氏は、表現技法や大意を重
視した授業も大事だとした上で、

限られた授業時間の中で端的に内容をまとめ、生
徒の納得と理解を促すことが必要であるため、解

釈の妥当性を決定する緻密な分析は第一線の古典
文学研究の成果に全面的に依拠し、実際の授業で
は細部の詳細な分析について大胆に捨象すること

もあると思うのだ。

と述べている^(注一)。今回示したふたつの切り口はともに、注目することばが限定される。対象とする表現を絞り、その一点に注目する作業を通して歌の配列を読み取ったり、そのことばの表わす世界を理解したりすることは十分に可能であると考える。

小林氏はまた

すぐれて現代的な視点からも面白さを感じ取れるようなテーマを設定し、独自の切り口で和歌の魅力を伝えることも、時に必要なのではないだろうか。教員自身が一定の価値観を持つたうえで、「これが和歌の面白さだ」と生徒達に正面から語るための立脚点の模索こそが、極めて重要な課題であると思われるのだ。

とも述べている。配列や「歌ことば」に関心を持つのは、まずは教員の側である。教員が多くの和歌の用例を集め、切り口を示したうえで授業を進める。授業では一首の歌についてしっかりと説明し、解釈に至る過程を生徒と共有する。それが出来ていけば、他の多くの歌の解釈については「第一線の古典文学学研究成果」

に依拠した注釈書の類に頼つてもかまわない。しっかりと説明した歌をきっかけに、前後の配列を読み取ったり、歌ことばの世界を語っていけばよい。一首だけではわからなかった広がり語る教員の姿を通して、生徒に同様の気付きをさせるような展開を工夫する余地はあるように思われる。生徒自らが進んで歌集をひもといたり、ことばの用例を探したり、といった作業をする下地を用意してやればよい。

以前高校二年生対象のテストで、古今集の八九番歌までの十六首を連続して提示し、「ここにあがった歌の多くに「散る」という動詞が用いられている。その活用形や接続に注目し、「1」から「16」までおまかにどのような基準で並んでいるのか、指摘しなさい」という出題をしたことがあった^(注二)。和歌単元の学習到達度を確かめる学期の定期テストではなく、教科の学力全般を測る実力テストでの出題である。あえて授業では扱っていない和歌ばかりを用意した。多くの歌に含まれる「散る」という動詞に注目させることで次のような解答を得ることが出来た。

・ 1では散る前の様子を詠っているが、2以降は散っている様子を詠っており、16では散った後の様子が詠われているように、桜の花が散っていく順に並べている。

・ 未然↓連用↓完了という移り変わりで、桜の花が散りそうなどころから散り終わるまでの時系列で並んでいる。

・ 1～6までは満開の桜を楽しんで、散るのを心配し、7～15では散っていく桜を「風」や「雪」などの表現を用いて美しく描き、16では散った後のさびしさを描いている。

授業内で生徒と一緒に読み進める時間をとることが出来れば、より充実した読解が生まれることを予感させる答案である。

一首の理解に始まり、教員が配列や歌ことばといった切り口を提示し、生徒が同様の箇所や語を検索するなどして読みを深めたり、その調査結果や自身の読みを発表したりするような授業展開は、中教審の答申に対応する要素を多分に含んでいる。

隣り合う歌の連関をさまざまな角度から考え考察し他者へ伝えることや、用例を集め整理・分析しそれを言語化し他者に伝えることは、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」と重なり、「言葉を通じて伝え合う力」の涵養にもなる。もちろん「アクティブ・ラーニング」としての授業展開でもある。

また当該歌と他の歌とを比較した上であらためて当該歌を解釈し直したり、理解を深めるといった過程は、「対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付ける」見方を学ぶことにもなる。

これらの作業を通して、勅撰集の基盤である配列への理解を深めたり、「歌ことば」にこめられた意味を理解することで、古典和歌の豊穡な世界に触れ、また日本人の季節感や時間意識の土台に勅撰集があることへの理解につながる見方が得られる。今回例に挙げたふたつについて言えば、散る桜を雪やその他に見立てる発想は万葉集には見られず、古今集の時代になって多用された手法である。「山里」という語が和歌に見られるのも平安時代以降の資料で、やはり万葉集では

使われていない。いずれも奈良時代の半ば以降から平安時代の初期にかけての積極的な中国文化の摂取に影響されていることである。「上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める」ための有力な方策を獲得することにもなる。

和歌一首の解釈に重きを置く授業だけでなく、多くの和歌を集めた中でさまざまな分析や読み取り方をした上でその解釈をより深めること。そのことが古典文学の魅力を感じる道筋を開くことになる。本稿で示したふたつの切り口に留まらず、なお多くの方法を模索していきたい。

(注)

- 一 調査対象は本稿執筆時である二〇一六年度使用の教科書及び指導書である。
- 二 以下、引用する和歌の本文は新編国歌大観により、適宜表記を改めた。
- 三 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」平成二八年二月二一日・中教審第

一九七号。引用は文部科学省ホームページに掲載の答申による。

四

青木太朗「新撰和歌」をめぐって(『横浜国大国語研究』第一一〇号・一九九三年三月)、「古今和歌六帖」の配列をめぐって―編纂意識の側面―(『和歌文学会編『和歌文学研究』第八三三号・二〇〇一年二月)、「紀貫之詠歌の側面―恋歌から見えてくるもの―」(浅田徹・藤平泉責任編集『古今集・新古今集の方法』笠間書院・二〇〇四年一〇月)など。

五

中村佳文「『古今和歌集』教材論―季節観念の享受という視点から―」(『早稲田大学国語教育研究』第二九集、早稲田大学国語教育学会・二〇〇九年三月)

六

福田孝「古文を楽しく読むために」(シリーズ「日本語を知る・楽しむⅠ ひつじ書房・二〇一五年一〇月)鈴木宏子「古今和歌集の恋歌について―『構造論』の授業における可能性―」(『千葉大学教育学部研究紀要』第五四卷、千葉大学教育学部・二〇〇六年二月)

七

古今集の配列については夙に松田武夫「古今集の構造に関する研究」(『風間書房』一九六五年九月)において全歌を対象に配列の精緻な分析がなされ、古典

八

の授業における可能性―(『千葉大学教育学部研究紀要』第五四卷、千葉大学教育学部・二〇〇六年二月)古今集の配列については夙に松田武夫「古今集の構造に関する研究」(『風間書房』一九六五年九月)において全歌を対象に配列の精緻な分析がなされ、古典

和歌研究者にとつては自明のことである。ただし、本稿の読者として、必ずしも古典和歌に馴染みの深くない国語科教員を想定したときに、大まかな流れを確認することは必要であると考え、現代語訳と併せ記しておく。

九 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』(岩波書店・

一九九四年一〇月)。以下、小町谷氏の引用は同書による。

一〇 寛平四(八九二)年秋頃の開催。是貞親王は宇多天皇の兄。

一一 小林俊洋「和歌文学研究と高等学校における授業実践について——「俊成自讃歌のこと」を教材とした実践報告——『国語と国文学』第九二巻第一一号(特集・教育と研究)、東京大学国語国文学会(発行、明治書院)・二〇一五年一月)。以下、小林氏の引用は同論文による。

一二 提示した和歌は次の通りである。

僧正遍昭に詠みておくりける 惟喬親王

1 桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて桜の花の散りけるを見て詠める

承均法師

2 桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにすらる

桜の花の散り侍りけるを見て詠みける

素性法師

3 花散らす風のやどりはたれか知る我に教へよ行きてうらみむ

雲林院にて桜の花を詠める

承均法師

4 いざ桜我也散りなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

あひ知れりける人のまうで来てかへりにけるの

ちに詠みて花にさしてつかはしける 貫之

5 ひとめ見し君もや来ると桜花けふは待ち見て散らば散らなむ

山の桜を見て詠める

6 春霞なかくすらむ桜花散る間をだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に、風にあたらじとておろしこめてのみ侍りける間に、折

- れる桜の散りがたになれりけるを見て詠める
藤原因香朝臣
- 7 たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり
東宮雅院にて桜の花のみかは水に散りて流れけるを見て詠める
菅野高世
- 8 枝よりもあだに散りにし花なれば落ちてても水の泡とこそなれ
桜の花の散りけるを詠みける
貫之
- 9 ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへにしづ心なし
「桜のごと疾く散る物はなし」と人の言ひければ詠める
- 10 桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ
桜の花の散るを詠める
紀友則
- 11 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
春宮の帯刀の陣にて桜の花の散るを詠める
藤原好風
- 12 春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む
桜の散るを詠める
凡河内躬恒
- 13 雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ
比叡にのほりて帰りまうで来て詠める
貫之
- 14 山高み見つつ我が来し桜花風は心にまかすべらなり
題しらず
(一本) 大伴黒主
- 15 春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなれば
亭子院歌合歌
貫之
- 16 桜花散りぬる風のなごりには水なき空に浪ぞ立ちける